

詳細分布調査

丸子山城跡・福富城跡・佐世城跡

1988年3月

島根県

大東町教育委員会

序

大東町内には数多くの遺跡があると言われていますが、これを証するに足る古文書類はまことに乏しく、また、発掘し確認された遺跡はごく一部に過ぎません。

近時ますます開発・破壊が進行するなかで、遺跡の位置・範囲を確認して正確に記録しこれを保護・活用するために、今年度から遺跡の分布調査を行うこととし、今年度はとりあえず実態の最も把握されていない山城跡を中心として詳細分布調査を実施しました。

中世城郭の調査は県内でも緒についたばかりの現在、本調査はまことに有意義なものと考えます。

この調査に直接当っていただいた調査員の方々をはじめ、ご指導・ご協力をいただいた島根県教育委員会や土地所有者、近隣の方々に厚く御礼申し上げると共に、この冊子が、文化財保護への理解を深め、貴重な文化遺産保存のため活用されることを念じてやみません。

昭和63年3月

大東町教育委員会

教育長 野々村 安生

例　　言

1. 本書は大東町教育委員会が、昭和62年度国及県の補助を受けて実施した大東町内遺跡詳細分布調査（主として丸子山・福富・佐世各城跡について）の成果報告書である。
2. 調査の体制は次のようにある。

調査主体者	大東町教育委員会	
	野々村安生 教育長	
調査指導	宮沢明久	島根県教育文化庁文化課 埋蔵文化財1係係長
	ト部吉博	島根県教育文化庁文化課文化財保護主事
	蓮岡法暉	八雲村立八雲中学校教頭
調査担当	杉原清一	島根県文化財保護指導委員
調査補助	藤原友子	
事務局	岩田 寛	教育次長
	松田 勉	社会教育係長
	田中英光	主事
	長妻英文	社会教育主事
	狩野 弘	社会教育指導員
	安井 功	タ

3. 本書及び調査に使用した地図は、調査者の実測によるものほかは大東町建設課及び農林土木課所管に関わる地形図である。
 4. 各城跡についてはその郭配置を踏査実測し、付近地帯については踏査して表微観察を行った。なお、古墓についてはその石塔に着目したため、移動された場合もあり、正確に元位置とは限らない。
 5. 踏査にあたって小字地名及び口碑伝承を多く参考とし、所在地に表記した。
 6. 調査にあたって次の方々から協力並びに情報提供を得た。記して謝意を表します。
- 景山源栄 古山好雄 星野好夫 吾郷芳幸 加藤光雄
糸原勇雄 松村忠義 森山 崇
三島武義 藤原清一郎 森山正治 関 昭見
福留自治会 金成自治会 城山自治会
農林土木課 建設課
7. 実測図中の方位は磁北を示す。
 8. 本書の執筆・編集は調査者が行った。

目 次

序

教育長 野々村安生

例 言

はじめに

松田 勉 1

I 遺跡の分布状況	(以下) 杉原清一 3		
1. 分布図 (1)			
宇大東地内について	宇金或地内について		
東阿用中心部について			
2. 分布図 (2)	宇佐世地内について		
II 丸子山城跡10		
1. 立 地			
2. 城 郭			
主郭部	大手郭群	搦手及び後背郭部	縄張りの特徴
3. 小 結			
III 福 富 城 跡14		
1. 立 地			
2. 城 郭			
大手郭群	搦手郭群	後背郭群	縄張りの特徴
3. 小 結			
IV 佐世城跡と小木戸城跡			
A 佐世城跡18		
1. 立 地			
2. 城 郭			
主郭部	張出し部	後背部郭群	城郭構成の特徴
B 小木戸城跡23		
1. 立 地			
2. 曲輪の配置			
3. 縄張りの特徴			
C 小 結25		

はじめに

昭和61年8月、本町東阿用地内山林で採土を目的とした開発協議を受け、現場踏査により福富城跡を新たに発見し、これを一つの契機として昭和62年度から国の補助事業として詳細分布調査を実施することとなった。

本町には古代から中世・近世にいたる数多くの遺跡が存在するとみられるにもかかわらず、その遺構や遺物の分布状況の把握は不充分であり、未発見の遺跡も未だ多数存在するものと予想される。これらの遺跡の実態を明らかにすることにより町民の理解と关心を高め、地域の貴重な文化遺産として将来にわたって継承し、活用することが大切である。

今回調査した福富城跡・佐世城跡・丸子山城跡は、いずれも中世の山城とされ、当時の私達の祖先に直接の影響力をもち、以後の地域の展開を語るのに欠かせないものであるにもかかわらず、過去に調査資料や文献が乏しく、このままにすれば開発や時の推移とともに忘却され消滅するのは必至であり、早急な調査を行い開発の破壊から保護するため、全体事業の初年度に着手することとした。

調査には県文化課の全面的なご協力をいただき、島根県文化財保護指導員杉原清一氏に依頼し、今年度の調査は、昭和62年7月から8月にかけて、現地踏査と遺構の実測を中心に行った。この時期は梅雨期から盛夏にかけてであり、草木の繁茂など悪条件の中での踏査は見通しも悪く思いのほか難渋した。この踏査に際して積極的に情報を提供していただいた多くの方々をはじめ地域の方々に深く謝意を表したい。

今年度を手始めに、次年度から逐次大東町全域にわたる分布調査を計画している。この調査によって、郷土の歴史解明が更に一步進められ、文化財保護への理解を一層深めると共に、この調査の成果を郷土の発展のために活用したいものである。



大東町

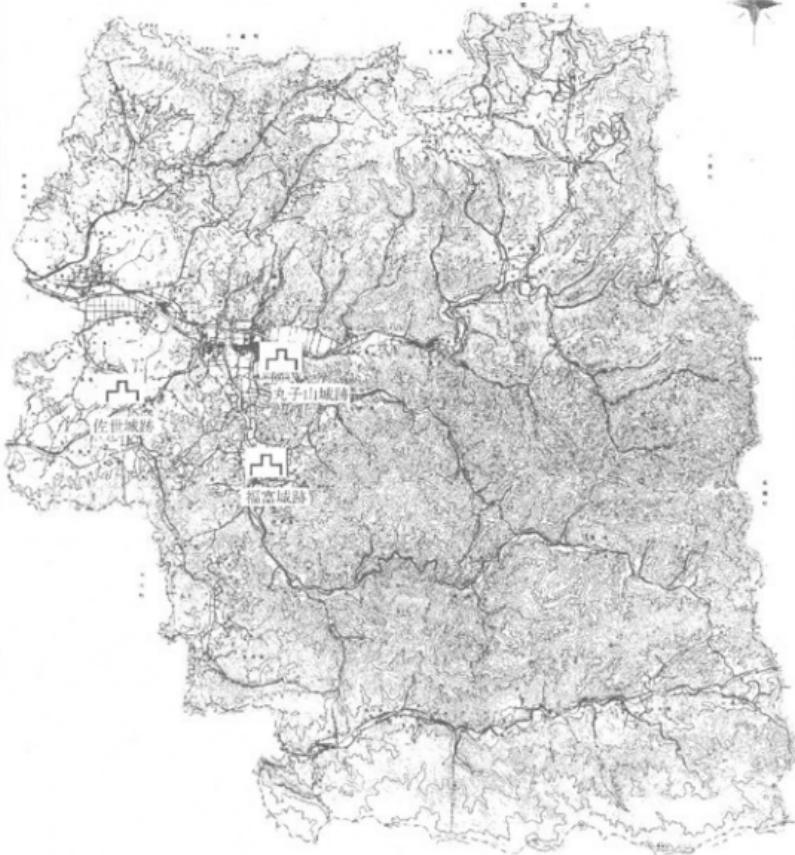


図1 調査地點

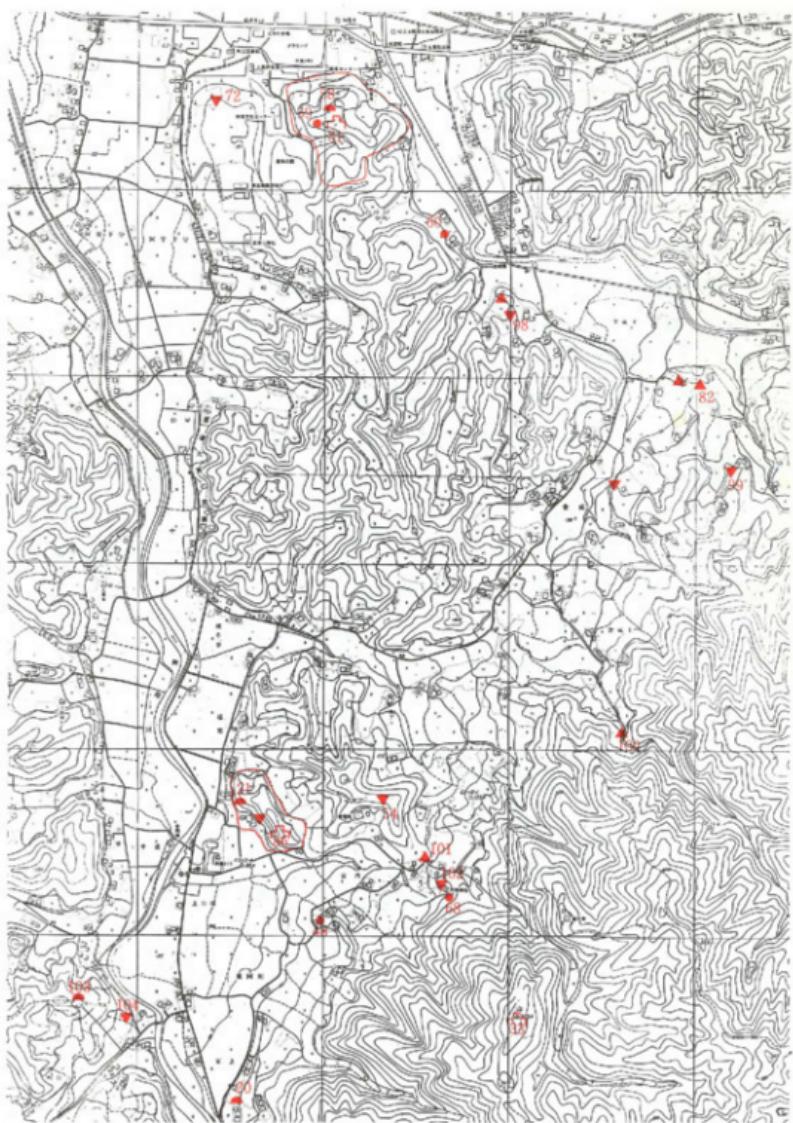


図2 遺跡分布図(1)

表1 遺跡一覧表(1)

番号	種別	名称	所在地	現況	備考
20	古墳	叶坂古墳	大字東阿用字便坂	雜	横穴石室露呈
21	横穴	後山横穴群	タ字留553	山林	須恵器
31	城砦	丸子山城跡	大字東字丸子山・他	公園	損傷多し
33	タ	阿用城跡	大字東阿用字宮内	山林	(未調査)
48	遺物散布地	天場遺跡	タ字天場	タ	
54	古墓	善明寺後山遺跡	タ字土戸井	タ	
58	古墳	丸子山古墳	大字東字丸子山	公園	(古墳?)忠靈塔あり
59	遺物散布地	丸子山遺跡	タ字和多田	畠	
60	タ	大畠遺跡	大字金成字大畠	タ	
68	タ	宮谷遺跡	大字東阿用字宮谷	境内・他	
72	古基	野田の五輪塔	大字東字野田	墓地	高さ1.60m
82	生産遺跡	松尾窯跡	大定金成字松尾	畠	瓦・什器
86	城砦	福富城跡	大字東阿用字要害・福留	山林原野	堀切・欽形阻塞
98	古墓	金穴内古墓	大字金成字金穴内	墓地	五輪塔・宝匱印塔
99	タ	前屋敷家の上古墓	タ字前屋敷	山林	タタ
100	生産遺跡	金坂谷たら	タ定金坂谷	田	鉄津
101	タ	笛屋裏たら	大字東阿用字笛屋	宅	のろ塊・金屋子神
102	古墓	阿用神社脇古墓	タ字瀧戸	雜	五輪塔片
103	横穴	岡村八幡宮横穴	大字岡村字宮ウ子	境内	1穴開口
104	古墓	川平古墓	タ字川平	山林	龕入印塔

記号図

● 遺物散布図

▲ 古墳・横穴

△ 城砦

▼ 古墓

▲ 生産遺跡

◎ その他

※ 図中の番号は「島根県遺跡地図(1987版)」の遺跡番号を踏襲し、新しく発見した遺跡はその続き番号を付した。

I 遺跡の分布状況

1. 分布図(1)

丸子山城跡・福富城跡の付近と、その間ににある金成地内について城郭関連を主目的として踏査した。

1) 字大東地内について

丸子山城跡(31)の地内には、かつて周知されている遺跡として丸子山古墳(58)と丸

丸子山遺跡（59）が挙げられている。丸子山古墳は城跡最頂部の櫓郭そのものとされているが、別記（Ⅱ章）のように現在忠靈塔が建てられており、はたして古墳であったものを城郭として転用したものかどうかは不明であり、古墳としての遺跡的意味はほとんど失われているとみられる。丸子山遺跡となっている地点は城域東側の斜面畠地を中心とするあたりで、かつて土師器等が採取された。現今では確認できなかった。なお、丸子山城跡は後述（Ⅱ章）のように戦国末期の遺跡とみられる。

丸子山城跡西隣の丘陵は野田原と呼ばれ、その北端は現在墓地群となっている。この墓地群の最頂部付近に野田の五輪塔（72）がある。高さ160cm軸幅58cm凝灰岩製で火・水輪は割れており針金で縛ってある。これは天文年間、尼子方に人質としてとられていた毛利の家臣光永中務なる者が秘かに脱出したが、この地にて追手に討たれた。その墓碑と伝えられている。しかし、五輪塔の類例からするとこの塔の製作は少し時代が下るようにみられる。

2) 宇金成地内について

金成橋のわざか下手西側の丘麓の畠地に大畠遺跡（60）があり、かつて古式土師器が採取され、落込みも認められて住居址かとされるものである。現況畠地で地表観察では確認できない。

鶴本宅（家号金穴内）裏手の突出する丘陵端には古墓（98）があり、現墓地とその上の段に多くの五輪塔片が集積されている。また宝鏡印塔片もみられる。いずれも小型の凝灰岩製で近世初頭ごろのもの。またこの丘陵突端には鉄滓が出上るとことであったが草深く確認できなかった。

金成上地区を中心に注目すべき地名が多く見られる。「地頭瀬」「竹ノ下(館の下)」「坪之内」「上屋敷」「奥屋敷」「大成」「坪の内」等が挙げられ、刀の血洗池、と伝えるところもある。これらは中世に地頭の居住区域を暗示するものとみられる。付近にはやや時代にずれがあるが、小型五輪塔片のみられるところもある。

成木地区の藤原宅（家号前屋敷）の裏手丘陵端には墓地とその隣接に古墓（99）があり、多くの小型五輪塔片が集積されている。また墓地の一隅には宝鏡印塔もある。様式から近世初頭を下らないものであろう。

金坂谷からは磨石城や蓮花寺へと登る路が山へ入って行く。さらに谷奥へいくと金坂谷たら跡（100）がある。現在は小さな谷田となっているが、これを拓く時多くの鉄滓が出て、第二次大戦ごろ再生鉄をとるために出荷したと言う。

このほか成木谷入り近く、近代の窯跡（82）があり、その近くでも鉄滓がみられたとのことである。

3) 字東阿用中心部について

福富城跡（86）（Ⅲ章）は東阿用中心部にある丘城で、居館跡と見られる宅地（家号土居）を含む小字「要害」「福留」の全城である。戦国末ごろの遺構がよく保存されている。なお、この城跡西側崖面には後山横穴群（21）があり、3穴開口しているがもとは5穴であり、須恵器等が出土したところ。

この福富城跡に関連するとみられる小字に地名「水の手」「大首」等がみられる。善明寺裏山には集石遺構（54）があり祭祀跡かともみられる。阿用神社付近には須恵器片が散布する宮谷遺跡（68）や五輪塔片の散在する古墓（102）がある。浦辺宅（帷屋）裏（101）には大きな鉄滓を金屋子神と共に祀っており、付近にたたら製鉄跡の存在が窺われる。字天場の畠地（48）からはかって古い様式の須恵器が出土した。

標高309mの磨石山は阿用城跡（33）であり、蓮花寺をも含む雄大な山城であるが、城郭についての詳細は未調査である。因みに蓮花寺との間の谷は小字地名「切通し」となっている。この城跡から西へ下った麓には小字地名「五城堀（御城堀）」があり懸切りが想像されるが、園場整備によって旧地形は損なわれてしまった。その近くには家号「竹ノ内（館の内）」の旧宅地がある。城山への登路もこの後背谷間から認められる。

またこの東上地区には叶坂古墳（20）があり、横穴式石室が露呈している。阿用川の西、岡村八幡宮の坪殿東側には横穴（103）が1穴開口しており注連が張られている。この八幡宮の東麓で川沿いの道端には龜入宝瓶印塔や五輪塔の古墓（104）がある。

以上を概観すると中世戦乱の過中にあった地域でもあり、中世の古墳やまた地名から製鉄跡などが多く、それらの間にあたって古墳・横穴や遺物散布地が点在する地帯である。

2. 分布図(2)

佐世地内については、佐世城跡を含む中心地帯について踏査した。

城跡は佐世城跡（27）、小木戸城跡（109）、竹平砦（108）などがあり、その関連もともに別項（Ⅳ章）に記述する。またこの地域には古墳の多いことが目立つ。

古墳についてみると、上佐世地内では佐世神社近くの丘陵端に白神古墳（66）と神代古墳（49）があり、置谷神社から延びる丘陵端には宮前古墳群（106）が3基認められる（図5）。この宮前古墳は畑地に掘られており、石室が完全に露呈した2号墳と半裁され石材が一部散乱した1号墳、そしてわずかに地形が盛り上がってその跡を残し「塚」の石碑が建つ3号墳とである。

下佐世地内では竹平砦の一隅にあたる竹平古墳（107）は円墳。下流へ下って字西光寺の谷の最も奥まって、路の越すあたりにある山伏塚古墳群（95）は、1基は半裁されて『山

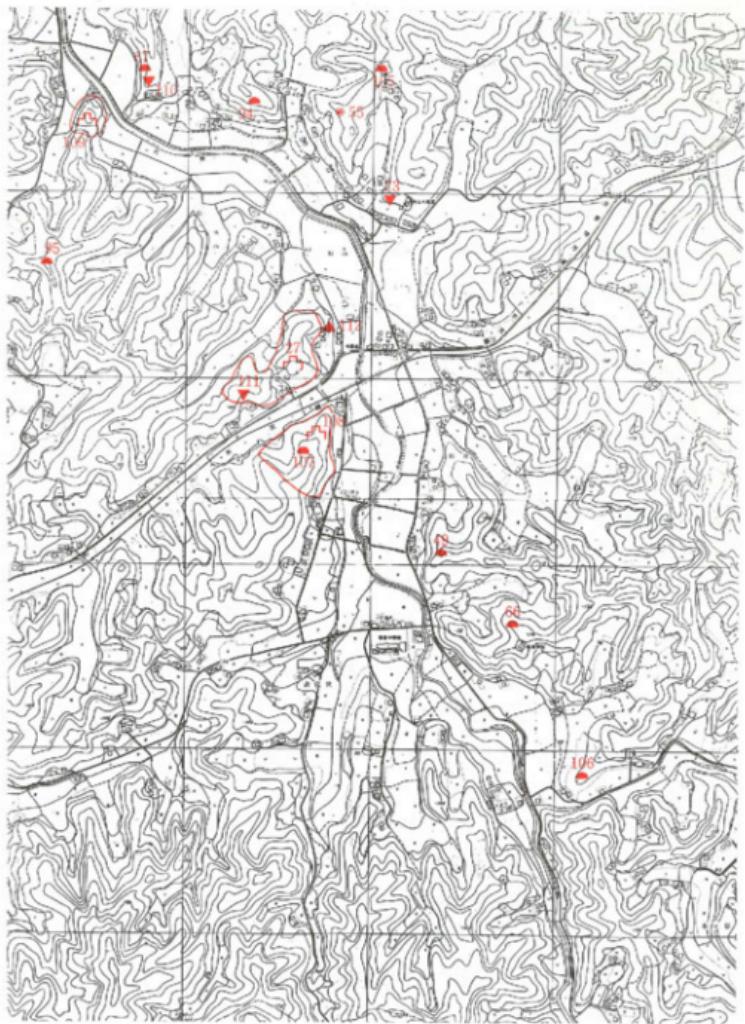


図3 遺跡分布図(2)

表2

遺跡一覧表(2)

番号	種別	名 称	所 在 地	現況	備 考
27	城砦	佐世城跡	大字下佐世字城山・他	谷園 ・烟	損傷あり
49	古 墳	神代古墳	タ 字神代1368の3	山林	
55	経 塚	狩山経塚	タ 字狩山1503の1	タ	消滅
66	古 墳	白神古墳	タ 字白神	タ	
67	横 穴	御室山横穴	タ 字寺ノ上	タ	2穴?
73	古 墓	佐世伊豆守の五輪塔	タ 狩山八幡宮	境内	高さ1.8m、2基・他
94	古 墳	上垣古墳群	タ 字上垣	山林	円墳2
95	タ	下佐世山伏塚古墳群	タ 字家之奥	タ	円墳2、内半墳1
105	タ	源入寺上古墳	タ 字井戸谷東平	タ	円墳
106	タ	宮ノ前古墳群	大字上佐世字宮ノ前	烟	3基、封土消失
107	タ	竹平古墳	大字下佐世字竹平	山林	円墳
108	城 砦	竹平砦跡	タ タ	タ	単郭64m
109	タ	小木戸城跡	タ 字小木戸他 字城山	タ	堀切、木戸跡等
110	古 墓	城光寺上古墳	タ 字寺ノ上	タ	五輪塔片
111	タ	岡柳古墓	タ 字岡柳	原野	五輪塔片
112	生産遺跡	城山下製鉄跡	タ 字城山	山林	鉄滓、金屋子神

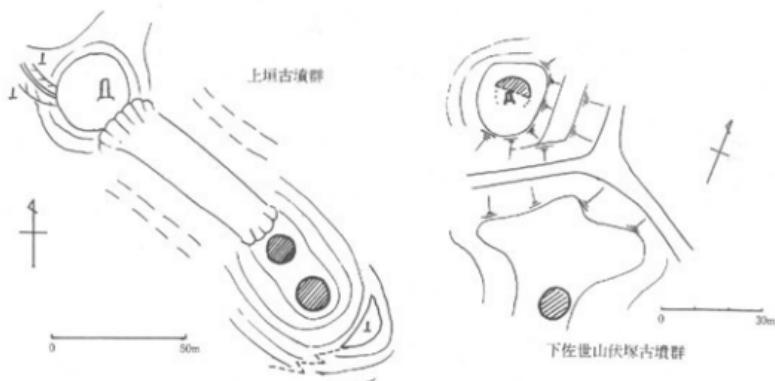


図4 踏査図

伏塚、の碑が建ち、路を隔てて南にもう一つの円墳がある。佐世川の北、愛宕社を祀る丘陵の端部に上垣古墳群があり、円墳2基が認められる。また源入寺の真上にも円墳(105)とみられるマウンドがある。このほか代次地内には、消滅して位置が特定できない古墳があったとのことである。

横穴は城光寺下手の丘陵腹面(67)に2穴以上ある。

古墳についてはその多くはIV章に述べているが、狩山八幡宮脇の佐世伊豆守の五輪塔(73)は、格別に大型で高さ180cmあり、年代の知られる塔として重要と言えよう。このほか佐世氏に関わる伝承をもつ古墓もあり、岡柳の上にあるもの(111)、城光寺上のもの(110)等である。

また、佐世城跡の東麓には金屋子神が祀られ、付近からはかって鉄滓が出土した(112)とのことである。精鍊か製鍊かは不明であるが、城下の職人を想像させるものである。

このほか源入寺の西に張り出す丘陵には経塚(55)があり、昭和46年発掘調査により和銭や壺が出土した。そして町営水道貯水池の敷地となり消滅した。

佐世地区についてこれらの状況を概観すると、佐世の集落に向かって張り出す丘陵上には多くの古墳が点在しており、分布密度が高いと言えよう。特に下佐世地内では南北各々

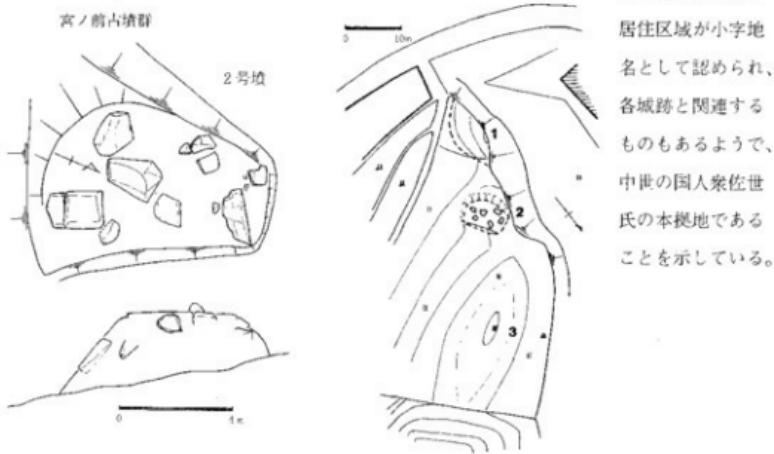


図5 踏査図 (宮ノ前古墳群)

Ⅱ 丸子山城跡

1. 立地

赤川の支流阿用川と清田川に挟まれた南の低丘陵群から大東盆地に張り出す支丘突端に位置し、標高90m、比高約40mを測る。この城跡は現在大東公園となり、大東町の町並みを眼下に、赤川に沿って東西に大東盆地が一望される。

大東盆地は東に海潮を経て松江・富田の各方面に通じる。西は佐世を経て本次へと、赤川に沿って下ると加茂を経て出雲方面へ。また、南後背方向は東阿用を経て仁多郡方向へ、正面南は山を越えて玉湯町へとそれぞれ路が続く。中世は大東南北庄と呼び、複数の地頭のときもあり、尼子毛利合戦時には一度ならず戦場となったところであり、領主もその都度変わるなど動乱の地である。また、現今においても交通路の交点であり、古くからの要衝の地である。

2. 城郭

この城郭は明治年間作製の字図によると、北側急斜面がわずかに山林であるほかはすべて畠地となっており、現在は町の公園として整備され桜の名所となり、本来の城郭構成は踏査によっては甚だ判別し難い状態になっている。従ってかなり大胆な推察も加えながら復元的に踏査結果をまとめてみる。

1) 主郭部

最頂部の桜が植えられている広場が主郭(1)であり、現状で幅45m、長さ80mほどの長方形をなす平垣面で、北側中央部に櫓台を設けた最も眺望のよい郭である。櫓台は錚台形をなし頂部は17mのほぼ円形をなすもので、現在忠靈塔が建てられている。また遺跡台帳によるとこれは古墳として取扱われているが、現状ではその当否は判定できない。

また、この郭の北東隅には町営水道の貯水タンクが築かれるなど、主郭としての姿は大きく変貌してしまっている。

この郭の南側部分はわずかにレベルが高く、本来は次に記す(2)郭に属する部分ではなかったかと思われる。

(2)郭は主郭から西へ分岐する支丘頂面で30×35mを測る。中央が高くなつており、南北の側面へ傾斜する地形で、現況は畠地である。この中央の高い畦状地は本来土壘であったとみられ、その西側約半分は削平されて主郭の平坦部と均平され、区別がつかない状況になつていている。

この(2)郭からさらに北へ折れて下降し(3)郭を中心に大手に囲まれる郭群へと連なる。また、主郭から北西へはわずかな帶曲輪を経て急斜面となり、麓には後背曲輪を伴った宗



図6 丸子山城跡

専寺が位置する。なお、この寺からは南へ山裾を迂回して緩かな谷地形が搦手にあたるとみられ、主郭の基部へと登る。

2) 大手郭部

主郭に続く(2)郭の下方に長さ30mの(3)郭を設け、さらにその下方へ段状に腰曲輪をまわしていて、西側下方の大手筋に対する防備とみられる。

この郭群は今では西半分を大きく削りとられ、西下方の大手とみられる谷間を埋めたて町の体育文化センターが建てられている。このための郭群の構成は判然としない。

3) 捶手及び後背郭部

主郭の東側に比較的緩かな斜面の畠地であり、下方は宗専寺に続く。これが搦手であると思われる。

主郭の東南端（おそらく(2)郭の土壘の東端であったであろう）は地形が極端に括れており、堀切り部で土橋が南後背丘陵へと連絡していたものとみられる。

この後背部丘陵から北へ派生する丘陵上には(4)の郭群4段と、もう一つの清田川に向って張り出す(5)の郭群3段がある。前者は搦手に対する横矢掛を含む備えとみられる。

また(5)の郭群には清田川に沿って北に突出することから、東北方向に対する備えも兼ねて搦手に対応しているものとみられる。

なお(5)郭群の南東面は急斜面で下方に腰曲輪があり、その下には民家（家号「立石」）がある。此所もかっては主要な居住区域の一つであったのかもしれない。

また、後背丘陵を稜線沿いに辿ると(6)の曲輪とみられる3段の削平段に至る。これは丁度大手の谷真正面にあたることから、これに対する備えとみることが適當であろう。

4) 繩張りの特徴

一般に繩張りの特徴は郭配置は当然ながら地勢の制約を受けることが多く、細部の手法に多くの工夫がなされるものである。

丸子山城跡についてはその大部分が公園として再整備され、また麓部は大きく掘削されているため、郭の外縁部や末端部の工夫が損なわれ、城跡としての特質が判断し難い。あえて言うならば、石垣が全く用いてないことと、(2)郭に土壘を認めること及び主郭後端の堀切りには土橋が想像されることなどが挙げられる。そしてこれから大まかに戦国期後半ごろの感覚が窺われる。

3. 小結

先ず小字地名についてみると、檜台の部分のみが「丸子山」であり、形状に由来するものとみられる。城名はこの字名によるものである。これより北方の斜面と麓の宅地や水田

は「和多田」であり、東西両側を含め「寺ウ子」となっている。この寺とは宗専寺を指すものであろう。

文献についてみると、そのほとんどが近世以降に書かれたもので、大同小異の記載である。「和多田」とも言い、馬田越中守又はその家臣和多田藤佐エ門の居城となっている。また麓の宗専寺については「天文13年城主馬田越中守誠房ノ家臣和多田藤佐エ門」により造立。また成蓮寺は「和田山の城主馬田越中守建立なり」とある。

この城跡を含む大東南北庄はかなり広い区域であり、鎌倉期の文書には地頭として土屋両家と飯沼の名がみられる。降って応仁の乱を経てのち赤川対岸の西寄りに本拠を置く馬田氏に移っている。

また、このあたりは數度の合戦の修羅場ともなっており、両隣する丘での野田原の戦もそれである。

これからから、もともと馬田氏かそれ以前から勢であったであろうが、今日の城跡構造は少なくとも野田原合戦のち、毛利治下になる前後のころ、言い変えるならば戦国後半～織豊期初めごろとみるならば繩張り感覚との異和感もないものと思われる。

Ⅲ 福富城跡

1. 立地

大東の地は赤川沿いに開ける盆地状地形である。その中心部の町並みから南へ、古くからの仁多街道に沿って約2.5km南に入った東阿用集落の中心部に所在する。北に流れる阿用川の東側で、折曲して張り出す低丘陵の端部に立地する。

城は標高114m、丘麓からの比高約30mで、全長270mほどの丘陵である。この丘陵西側近くを阿用川が北流し、南は東阿用のほぼ中心にあたる水田地帯であり、東は小谷を隔てて丘陵地帯に連なる。北は若干の間をおいて丘陵が阿用川に迫り、閉塞する地形である。

また南西後方約800mには独立峰磨石山があり、中世桜井宗的が撲った山城として著名であり、近くに蓮花寺がある。北西へ丘を越えると清田川沿いの金成地区へと連続する。

この城跡については文献や口碑がなく、昭和61年町教育委員会が行った土砂採掘に関わる事前の踏査によって発見したもので、小字地名は「要害」「福留」であるが集落名によって「福富城跡」と名称したものである。

2. 城郭

丘陵上を削平した曲輪は削り出しと盛土によるもので、土の城であり、石垣等は用いられていない。

ほぼ南から北(N30°W)への丘陵を2か所を堀切りによって、大手、搦手・後背の各郭群に三分割したもので、中小26の曲輪を数える。

1) 大手郭群

小字地名「要害」に相当する部分で、大きな堀切りによって切断された北の部分である。大堀切りを背に櫓曲輪とみられる(1)曲輪は13×7mと狭いもので、北に向っては自然斜面を緩やかに下陵し(2)曲輪へ至る。この曲輪は20×20mのほぼ三角形をなし、前方は約1mほどの段差で最大郭である(3)曲輪に接する。

この(3)曲輪は現況では高低差約5mを測るほどの斜面があることから、本来一つの曲輪であったのかは疑問である。東西60m、南北27m程度で北に聞く馬蹄形であり、さらにその下の(4)曲輪とによって、北西から登る大手口を包囲する構えとしている。尤も(3)曲輪北西端は土砂採掘によって削られており、先端位置ははっきりしない。

(4)曲輪北縁部には土塁が築かれており、(3)曲輪については塁地に拓かれておりはっきりしないが、かつては土塁があったものと思われる。

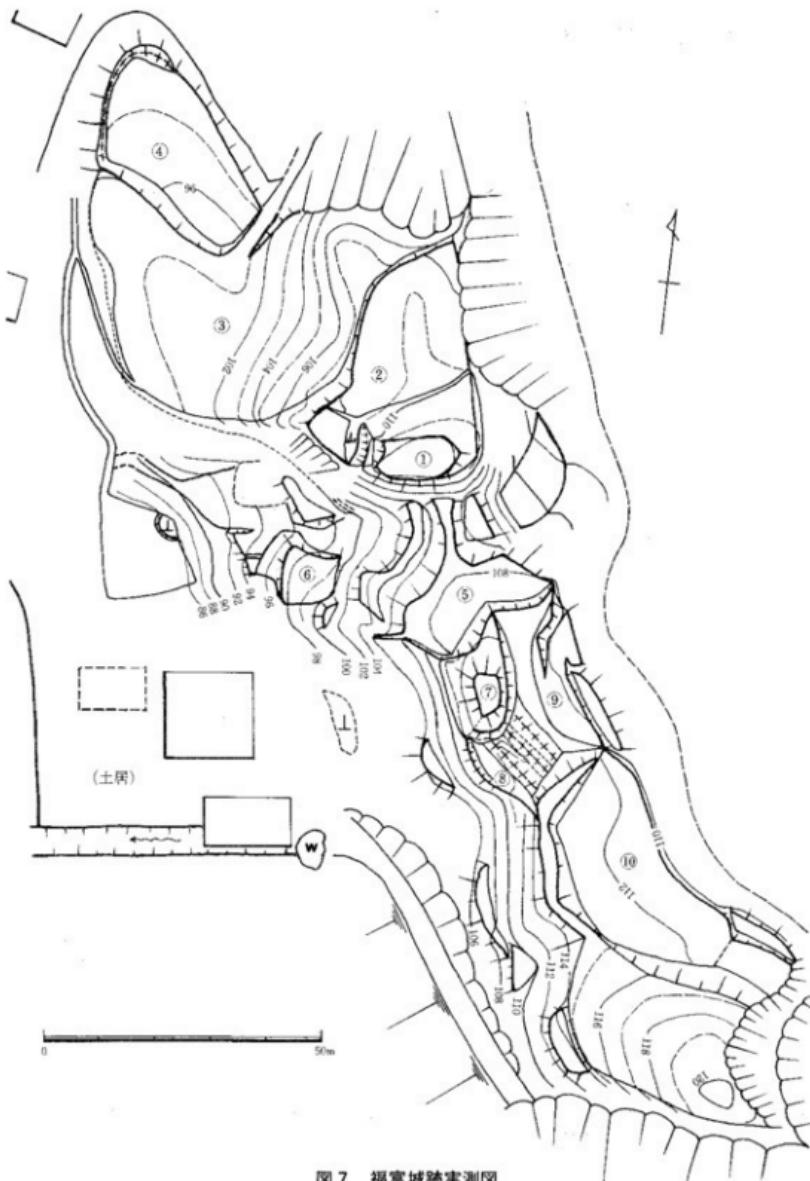


図7 福富城跡実測図

道すじを辿ると大手口から(4)曲輪との間を登って(3)曲輪の奥に至り(2)曲輪西端へと上る。(2)曲輪を横断してその東端から(1)曲輪を迂回しながら大堀切り部の土橋に達する。

2. 摺手郭群

この一画は中央部分にある。曲輪は狭小ではあるが複雑な配置であり、土居の居宅地裏から堀底に畝堀りを設けた堀切り部へ登る摺手口に備える曲輪群である。

(1)曲輪から約6mの深さの大堀切りは、底幅8mで中央には(5)曲輪に至る土橋が築かれている。この土橋から東への斜面には大小2段の曲輪があり東の谷間への備えとなっている。

西側では、土橋の下方から(5)曲輪下方にまで沿って帶曲輪が摺手口を囲むようにあり、さらにその下に(6)の対をなす小張出し部があって城戸虎口が設けられている。さらに城戸下には横矢掛とみられる小郭があり、宅地裏に下る。この道すじが摺手である。

一方、土橋から(5)曲輪を経て物見曲輪(7)の東側にある(9)曲輪へと迂回すると12×12mの広い堀底部に至る。これは(7)曲輪と次の(10)曲輪との間を切り下げた幅広い堀切りで、深さ約5mを測る。そしてこの堀底は縦4条の畝型阻塞が敷かれていて進入者を阻む。また、これは東側の谷奥から(9)曲輪へ進入した場合にも有効に働くものとみられる。

3) 後背郭群

畝形阻塞のある堀切りによって切断された南側丘陵奥部についてみると、その頂部付近の西側はほとんど自然地形をそのままとし、東側下方に地形を深く削り出して(10)曲輪を設けている。この曲輪の堀切りに面する辺と西側には、削り残した土塁が高く囲み土居状をなしている。広さも40×15mと第2位の大きさである。

この(10)曲輪から南東後方へとさらに小曲輪が接続しており、後方の善明寺や磨石城への登路へと路が続く。従ってこの一画は退路方向にあたる区画とみられる。

つまり阿用川沿い方面からこの城域を見ると、この後背郭群のあたりは全く自然丘陵としか見えないが、その裏手にあたる東側には上記のような曲輪が連続し、そして後方善明寺にまで至っているのである。

しかし、後方最南端部分は、後世道路改良によって大幅に削り去られ、曲輪の末端構造は今となっては知るべくもない。

4) 縄張りの特徴

城域全体は小規模であり、比高も低く居館後背の丘城である。北～北西方向、即ち阿用の入口部方向に対する構えであり、北に大手を、南西麓部に居館からの摺手を、そして南東後方へ退路を善明寺に導く構成となっている。

特筆すべき構造として堀底に設けた欝形阻塞が挙げられる。そして外縁部に所々土塁が築かれており、立地とともにこの城郭築成の時代が推察される。

3. 小 結

この福富城に関する文献上の資料や伝承は今のところ見当らない。

城跡付近の小字地名についてみると、北方直下に「水の手」、西側部には「庄屋々敷」「紺屋畠」「家床」「門田」等がある。また城域である「福留」地内には屋号「土居」の家があり、石垣と水路が壠状にめぐるもので、旧藩時代の大庄屋を勤めた家柄で、その墓地には五輪塔もみられる。このような状況からして、この土居は城跡に直接関与する居館地とみなされるところである。

東南方向には善明寺があり、伝えるところによると、応永年中禅宗に転宗したとのことである。そしてこの付近には「土土居」「庄屋畠」等の地名もあり、土居館との密接な関係が想像されるもので、城域からの最終脱出地点となるものであろう。

さらに此所から阿用神社を経て磨石城へと登路が上っている。しかし、それ故磨石城の支城としての福富城であるとは断じ難い、今後さらに検討を要することである。

しかし城域の手法は戦国時代半ばごろのものとみられるが、それ以前からの砦であったものの改修であるのかは判断し難い。

なお、著名な阿用合戦はおそらくこの付近がその舞台となったものであろう。

IV 佐世城跡と小木戸城跡

A. 佐世城跡

1. 立地

赤川支流の佐世川に沿ってほぼ南北にひらけ、その南上流部は山陵で閉じ、北下流部は加茂町に近く低丘陵によって括れる川沿いに細長い地区であり、古代・中世を通じて南北及び東西方向の交通路の辻にあたる地である。即ち北端近くを出雲国風土記所載の正南の道が通り、東へは大東を経て広瀬町富田へ連なり、西は本次・三刀屋へと通う。

佐世は古代から郷として見え、佐世神社を祀り、鎌倉期には八所八幡の一つ白上別宮が祀られた。

この佐世郷の中ほど、西への道筋を見下ろす位置の北へ張り出す丘陵端に佐世城跡が所在する。城跡は標高80mで比高30mである。

2. 城郭

城跡の調査は、その縄張り測量と踏査による築城手法の観察を重点に行った。また建物があったと伝えられる第4郭については、トレンチによる試掘を行った。

この城跡は丘陵端部を大きく堀切りで独立させ、北に向って下る削平段の中心部と、さらに北下方一段低く長い台地上の第4郭でまとめられている。堀切りの南後背部にも郭群を配置して後背の備えとし、これらによって囲まれる裾部に居館跡がある。

1) 主郭部

主郭部についてみると、最も高所の第1郭は櫓郭であり9×14mの長方形の郭で、側面は崖崩れで損壊しており、本來はさらに前方へ突出していたものと思われる。櫓郭へはこの郭奥中央からほぼ直登であり、その脇に井戸跡と言い伝える地点がある。この第1・第2郭からの展望は佳く、北方正面に守護社である狩山八幡宮を、北東には郷中心部の連坦地が一望される。

なお、第2郭から東に続くベンチのある三角形の部分は本来別郭で、約15mほど突出し南縁に削り出した土塁がある。その下方には居館が位置することになる。この張出し部の下方には狭い腰曲輪が付く。

以上の諸郭が中心郭を構成するもので、いずれもその外縁に土塁がめぐらされていたものと思われるが、現在は郭面が公園化により削平されており判定し難い。

第3郭は主郭の北東下にあり、本来2段で馬蹄形をなしていたとみられるが、現況は斜面をなした一面となっている。また西端は低土塁で、その続地は崖崩れで不明であるが、

主郭直下にあたるところからかっては別郭があったものと想像される。これは付近の人々語るところによると、その下方を通る路がかってはもっと北へ張り出した地形を迂回していたとのことにも符号する。

これら第3郭等によって構成される郭群は、馬蹄形の中を登ってくる大手口とそれに対する備えの構成であったと思われる。

以上の第1郭から第3郭については、すべて郭の外壁が強く削りたてられた切岸であり、石垣は全く用いていないものの、屹立する姿勢となっている。

2) 張出し部

第4郭は西側直下に字「柿の内(堀の内)」「土井畑(土井畑)」等の居宅地があることから、これらの後背曲輪も兼ねるものとみられる。第3郭の下を基部とし長さ80mの北端は、尖る地形の台地であり、現況は畠地等となっている。

先端近く小祠が祀られているこの郭は、西側と北端は崖であり、東側は郭面がやや緩斜して下降し、その下は宅地となっている。

この第4郭は口碑によると『藏のあったところで』あり、東裾部の宅地あたりは『武士屋敷』のところとされている。

この郭は畠地であり、試掘し易いのと、かって重機を用いて崩土を除去したことでもあり、建物構造の残存状況を確認する目的で小規模のトレンチ試掘を行った。

現在荒廃している南側約半分の区域約30×30mについて、7本のトレンチを設けて試掘した。トレンチは10mの方眼点を基準に幅1m、長さ4mとし横断方向である東西についてみた。

断面の状況は図9のようである。

T7及びT6の一部を除くいずれの箇所も地山面は、すべて重機によって荒く削られており、その上は直ちに厚さ12~20cmの耕作土であった。

T6では丘頂に近い西端部に一部分地山の削り残した部分がみられるが、地山面には耕作痕があるのみで、他の部分は擾乱地で埋められており、その上面が耕作土であった。

T7は西に傾斜する面についてであり、地山は地表下約80cmにある。この地山上には旧表土の一部とみられる暗褐色土がうすく被っている。上に擾乱した土を埋めたて上面が耕作土となっていた。

以上の様相からすると西に傾斜する端部には一段低い面があったようであるが、あまり広いものではないようだ。東に緩く傾斜する大部分の面については、そのほとんどが全域にわたって重機による削平がなされていることが判明した。そのためかつて中世のころのような郭面が、或は建造物があったかは全く判らなくなってしまっていた。

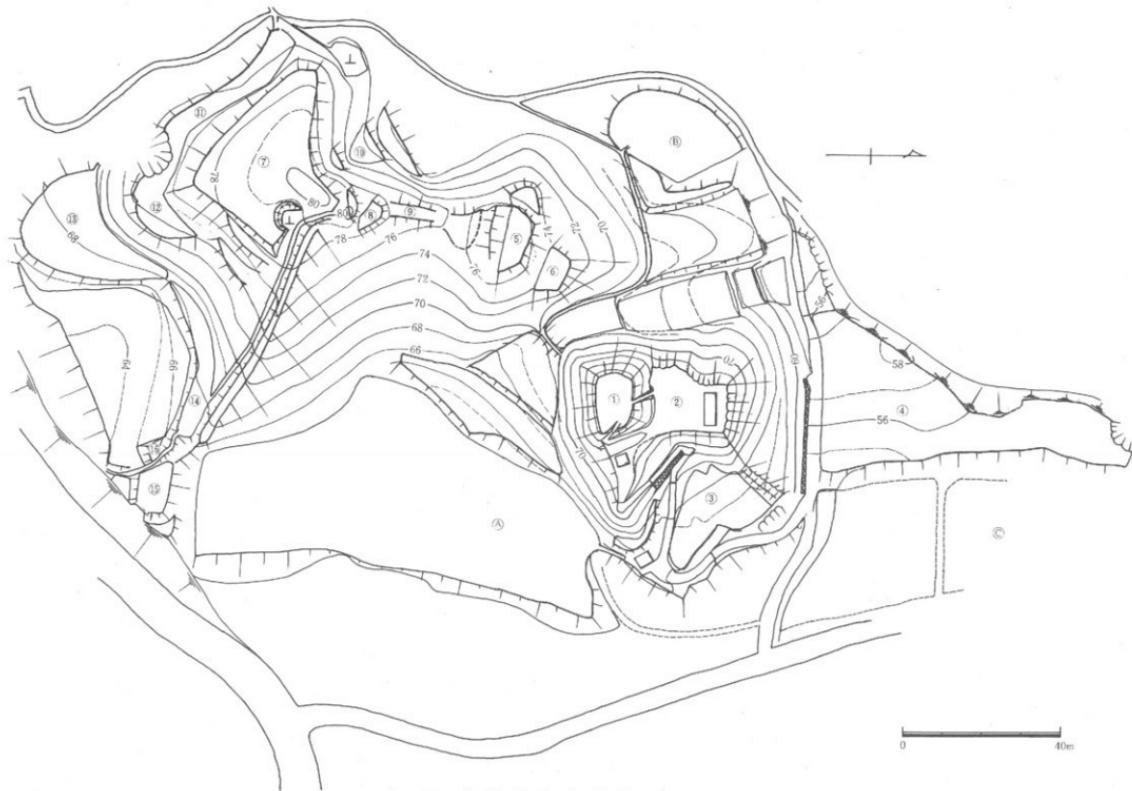
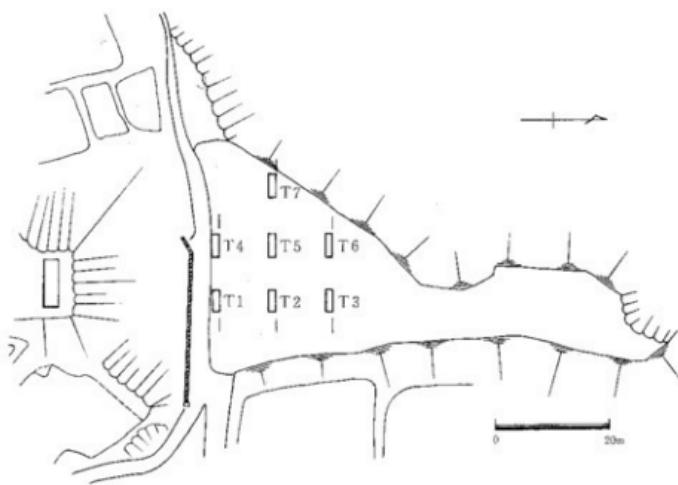


図8 佐世城跡実測図

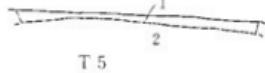


57.80

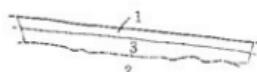
1. 耕作土
2. 地山
3. 埋土（ブロック入り）
4. 旧表土



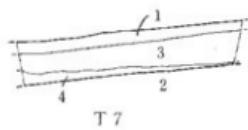
57.80



T 5

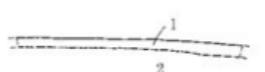


T 3

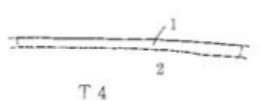


T 7

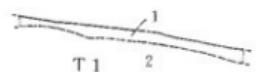
57.80



T 2



T 4



T 1

図9 トレンチ図

3) 後背部郭群

上記した大堀切りで切断した丘陵の南側にあたるもので、第1郭の横郭を堀切りの対岸にして、丘陵付近には低い土塁で区切られた第5・第6郭が後背部の防備となっている。

第5郭は第1郭とほぼ同じ高さで西端に小さな腰曲輪を副え、北東一段下って第6郭が堀底に備えている。

第5郭後背の低土塁を越えると、東西両側を強く削り落した土橋状(9)の棱線を行くと小曲輪(8)を経て、広大な第7郭に至る。

第7郭の頂部近く佐世氏累代の奥津城と伝える五輪塔の墓地がある。北西面のわずかな凹谷地形には(10)等の腰曲輪が3段あって字後古屋の谷間に對して備える。

南に向っては(11)(12)の腰曲輪があり、その下に張出し郭(13)が突出する。また墓所から東へ支尾根を削り出した土塁に沿って路を下ると、腰曲輪(13)を経て突出する端部に取出郭(15)など3つ以上の小郭と横矢掛とみられる小郭(16)などがあり、本次方面への街道に備えている。しかしこの先端部分は現在県道のため切られて消滅し不明である。

4) 城郭構成の特徴

南北約400mにわたる地域は、大きく3区分して構成されている。大堀切りによって区画され、現在城山公園となっている中央区画と、その北下方の台地上に細長く約80mの張出し部、そして堀切りから南の後背塙や城主墓地を含む曲輪群とである。

また、これらによって囲まれる東南側部に城主居館跡と伝える宅地があり、此所からは堀底を通って城山西側の俗称ジャンケ谷(城抜け谷?)にある後古屋(居宅地)へ連絡する。

概観して、大堀切りにより北の郭群構成は単純ながら独立した構成であり、郭外周は石垣は全く用いていないが、それに近いほど急に削りたてた切岸である。

この城域の東麓一帯は地名が古市であることから市場町の形成が窺われ、城郭の手法はこれを意識してのものとみられる。併せて北の張り出し地には蔵跡との伝承もあり、何らかの関連建物群があったとみられることも、これに対応するものである。

現状では公園化等によって損じた部位が多く速断はできないが、このような城郭配置の感覺は、その時代を織豊期から近世初頭ごろに位置づけることが可能である。

これに対し、堀切り以南の曲輪群は、堀切り直上部を除くと全体にその郭においてしまりない感じであり、特に郭縁部の処理において前者との差異は著しい、曲輪面も斜面のままのものもあり、また一隅に墓地も含むなど、居館後背部にはあたるが、より古様式とみられる。

即ち、この丘陵は戦国期後半ごろの城砦であったものを、のちにさらに堀切りを深くして、北方部分について近世の感覺の下に大改修したものではなかろうか。

B. 小木戸城跡

1. 立 地

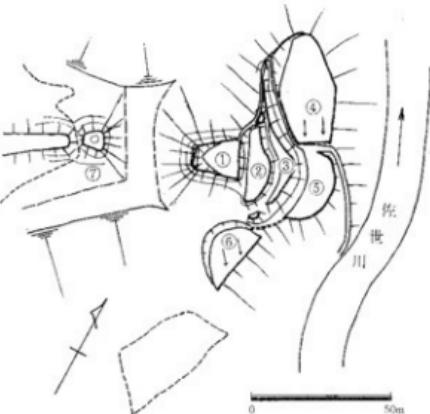
この城跡は佐世郷の北端にあたり、低丘陵によって閉塞する地形である。佐世川を挟んで対岸には城光寺の丘陵が迫る位置の、南から突出する丘陵先端に築かれている。

先端は佐世川に崖となって落ち、南側は字免別の狭い谷間を古代以来の路が通り、東南

は佐世郷が奥深く展望できる。

佐世城跡からは北西約900mの地点で、小字地名は「井ウガ（要害）」「城山」「小木戸」の3字である。主郭の標高は約60mで比高20mである。

この城跡の西側免別地内を南行する通路は古代以降の正南道である。佐世地内からの旧路は、この小木戸城跡後背部を越えて正南道に接続する。



2. 曲輪の配置

この城跡については踏査に併せて、
略測を行った。

城郭は丘陵突端部約80mを深さ6mの堀切りで独立させ、幅(南北)約100mの区域について合計6段の曲輪で構成している。

主郭(1)は15×7.5mの長方形で、左右両側と堀切りに面する3方向を土塁で囲み、八幡の小祠を祀っている。

北東へ一段下って(2)の20×8mで横長の郭が付設されている。この郭の北隅登路に面して小さい三角形の横矢掛が設けてあり虎口としている。

この虎口の下を横にすぐ狭い腰曲輪(3)があり、その南端にもわずかな小曲輪が接続し、主郭部の備えとなっているとともに、正面直下に登って来る大手口に対する真正面の構えでもある。

大きく下って大手口を挟む左右に(4)(5)の広い曲輪が設けられている。

(4)曲輪は西縁に削り出しの土塁があり、その上を路とし上方へ連らなっている。また、(4)郭面は高低差が大きく、本来は2つの曲輪であったのかもしれない。

(5)曲輪は前面が崖で佐世川に落ちるが、その急斜面を大手の横手路が登って来ており、これに真上から対するもので、(4)曲輪と対応して大手口に備える曲輪である。また(5)曲輪はその南端からさらに丘腹を廻って緩斜面の(6)曲輪へ続く。この(6)曲輪からはさらに南下方の宅地あたりに通ずるものとみられる。

堀切り後背部はわずかな頂部平坦面(7)曲輪があり、さらにその後方を尾根越の山路が通っており、木戸の所在したところと思われる。小字地名も「小木戸」でこれを示してい

るものであろう。

3. 繩張りの特徴

地形からして最も要害である佐世川河岸崖面を大手口とし、(4) (5) 曲輪で第1の虎口をつくり、(4) 曲輪の奥を西に折れて郭端の土壘上を登ると、(2) 曲輪端に第2の虎口が設けられている。

堀切り後背部には普段の路があり、ここに設けた城戸（木戸）を閉鎖することにより、寄手を否応なく堀底に導く工夫がなされている。

このような曲輪の配置と構成は単純であるが、郷の下口を守る構えとしては充分機能したものと考えられる。

C. 小 結

下佐世地内に所在する「佐世城跡」と北西約900mの「小木戸城跡」との間には注目すべき小字地名がみられる。

「西光寺」「西安寺」「城正庵」など仏寺名が多いこと、「古門」「柿の内（垣ノ内）」「後古屋（後小屋）」「土井畑（土居畑）」などの居住区域等を示すもの、或は俗称ではあるが「ジャンケ谷（城抜け谷？）」など城域構成に関与するもの等が挙げられる。また、佐世城跡東麓には「古市」があり、市場～町並みの形成が窺われる。佐世城跡から東へ、木次街道を隔てて平行する字竹平の丘陵上には、長さ64mに及ぶ狭長な単郭の曲輪があり、その西麓近く天ヶ谷長者伝説の居宅跡があり、その近くに妙昌寺跡の堂がある。この竹平柴も佐世家臣によるもので佐世城の出張りの一つとみられる。(図11)

寺社についてみると、いずれも佐世川を渡った北側の丘陵の麓であるが、小木戸城跡に對峙して城光寺があり、佐世氏5代の菩提所と伝えられる。佐世城跡に對峙しては、佐世氏9代正勝の菩提所で、寺名もその法号に由来する源入寺や、佐世氏ゆかりの狩山八幡宮があり、またその脇には「佐世伊豆守正勝の塔」と伝える大型五輪塔の墓所もある。なお、佐世氏8代清宗の墓所は、毛利の本拠山口県萩市にあると言われている。

これらの状況から概ね次のように言えよう。

佐世郷には出雲八所八幡の一つ白上別宮があったが、14世紀初めごろ地頭として佐々木氏の一族である佐世氏が入って来た。白上別宮は上佐世の佐世神社地と同所であり、従ってその領地も上佐世地内かと思われる。

その後に入った地頭佐世氏は、郷内のどのあたりを拠点としたのか不明であるが、地名・

城跡の分布等から下佐世を中心とするものようである。

15世紀の応仁の乱に始まる戦国期には、佐世氏は国人衆として急速に成長したもののようである。戦国時代半ばごろには、奥出雲へと富田からの路との交点に構える小木戸城跡が完備されていたとみられ、その居住区域は地名等からして、下佐世地内、特に佐世川の西侧丘陵部付近が中心であったと思われる。

16世紀に入って尼子毛利攻防戦では、佐世氏は尼子方の重臣として各地に転戦したが、のち毛利の麾下となり、これに従って佐世の地を離れ、替って山内氏の所領となった。しかし16世紀末には再び毛利氏から「名字之地」により佐世氏が領するところとなった。

この時佐世氏は9代正勝であり、この人に因る竹山八幡宮や源入寺などは、時代的にみても佐世城の大改修との関連が濃密であるとみられる。

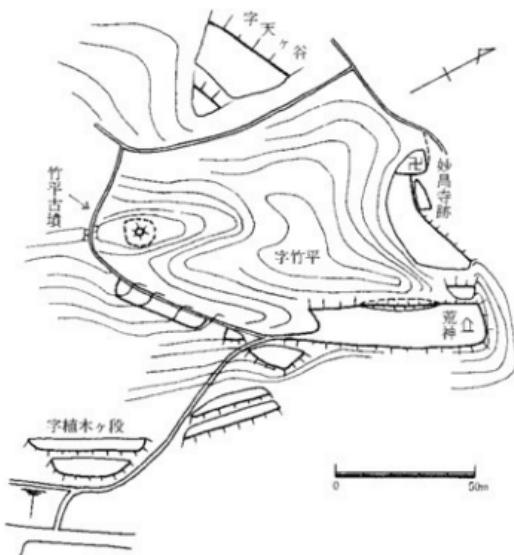


図11 竹平砦見取図

主な参考文献

- 『島根縣史』 第6卷・第7卷 島根縣 昭和3年
『新修島根縣史』 通史編1 島根縣 昭和42年
『大原郡誌』 大原郡教育会 昭和11年
『大東町誌』 大東町 昭和46年
『佐世乃木』 編纂委員会 昭和60年
『日本城郭大系』 第14巻 新人物往来社 昭和55年
『図説中世城郭事典』 一・二・三巻 新人物往来社 昭和62年
『日本地名大辞典』 32巻(島根県) 角川書店 昭和57年
『雲陽誌』 (複刻本)
『出雲私史』 桃好裕 (複刻本) 島根郷土資料刊行会 昭和47年
『雲陽軍実記』 (複刻本)
『出雲國風土記參究』 加藤義成 昭和32年
『出雲稽古今知図説』 (複写資料)
『出雲の石造美術』 伊藤菊之輔 昭和40年
『三刀屋氏とその城跡』 城跡調査委員会 昭和60年
『岡山の城の城跡』 (岡山文庫19) 藤行・市川・坂本 日本文教出版 昭和43年
『岡山の石造美術』 (岡山文庫55) 嶽津政右衛門 日本文教出版 昭和48年
『尼子氏の家臣団構成』 宮沢明久 『季刊文化財』 24 昭和49年

大東町行政文書から

明治22年編成 村字切図

上佐世村・下佐世村・大ヶ谷村・東阿用村・金成村

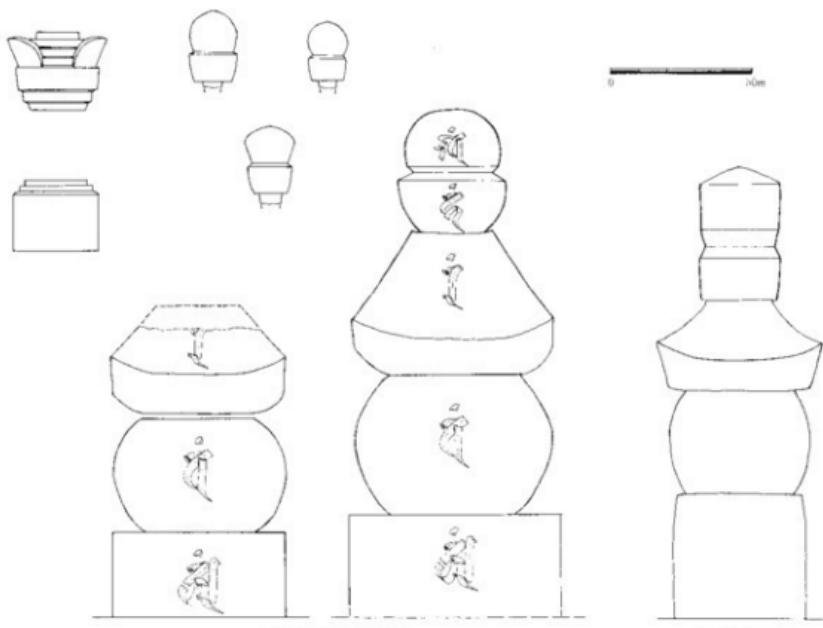
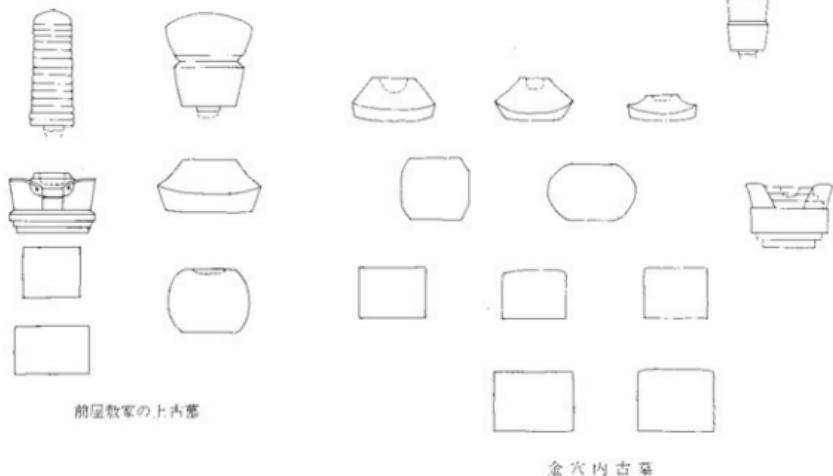


図12 石塔図



丸子山城跡付近（上空から）



野田の五輪塔



丸子山城跡（西から）



前屋敷家の上古墓



蓮花寺より福富城跡を望む



福富城跡と阿用城跡



佐世城跡



小木戸城跡



佐世城跡第4郭 試掘状況



竹平砦



宮ノ前古墳群



岡柳古墓



佐世伊豆守の五輪塔

詳細分布調査
丸子山城跡・福富城跡・佐世城跡

昭和 63 年 3 月

発行 大東町教育委員会
島根県大原郡大東町大字大東1673-1

印刷 曾田印刷
島根県大原郡大東町大字大東 765

